

プロフィール

大阪大学大学院で子ども兵について研究し、国際公共政策修士号を取得。在学中に経験した国際連合児童基金 (UNICEF) 東ティモール事務所でのインターンシップやウガンダ北部での現地調査を通して、将来にわたって国際協力に携わりたいという思いを強くする。卒業後は ADRA Japan という NGO にて、主に南スーダン駐在員として帰還民の生活再建事業を担当。その後、平和構築人材育成事業への参加を経て、現在は再度 ADRA Japan にて勤務中。

1. 平和構築人材育成事業に応募した理由を教えてください。

NGO 職員として働いて 3 年が経過しようとしていたころ、今後は大学院での研究以来の関心事項である「紛争の影響を受ける子どもの保護」にフォーカスして仕事をしていきたいと考えようになりました。さらに、南スーダンの僻地にある小さな村に駐在して、日々村人と交わる中で、彼らの生活に依然として紛争の影響が残ること、そして彼らが直面する困難に対して地方レベルでできることには限界があることを感じていました。そこで、紛争後の国づくりの中で将来的な対立の火種を摘み取り、恒久的な平和の構築を目指すアプローチを学び実践したいと考え、本事業に応募しました。本事業については、「平和構築基礎セミナー」に参加したり、研修員の方々と知り合う機会があったりして、以前から興味を持っていました。また、海外実務研修の派遣機関は様々な観点から調整が行われて決定されますが、自身の希望としては子どもの権利を専門とする UNICEF を挙げさせていただきました。

2. 国内研修の感想は？

国内研修は、平和構築について体系的に学び、最新の議論や講師陣の現場での実体験を知ることができる、非常に興味深いものでした。私にとって国内研修は、視野を広げ、また自身の経験についても振り返って整理する良い機会となりました。研修内容はプロジェクト・マネジメントの流れに沿った構成になっていましたが、事業の計画段階の前に紛争分析について取り上げられたことが、平和構築という文脈に事業を据えるという意味で、特に新しい学びとなりました。国内研修が広島で実施され、エクスカーションで呉や江田島を初めて訪れたことも、戦争と平和について考えを深めるうえで、とても良い機会をいただいたと思います。キャリア・プランニングや、履歴書作成や面接のスキルについても、実践的で本当に役立つ内容を学びました。最後に、同期の研修員と 6 週間にわたって寝食を共にする合宿形式で国内研修が実施されたことも、特に注目したいと思います。平和構築を含め、広く国際協力の仕事は、キャリアを続けていく過程が不安定で、求職活動は孤独な作業になりがちだと思います。そのような中で、“同期”と呼べる存在ができて、同じ目線で悩みを共有したり励まし合ったりできることは、とても大きな財産となりました。そのような強い結びつきを可能にしたのは、やはり、合宿形式での国内研修だったと思います。

3. 海外実務研修での活動について教えてください。

海外実務研修では、私は UNICEF コートジボワール事務所の HIV/エイズ対策・青少年支援部署へ

プロジェクト・オフィサーとして派遣されました。1年間を通して、所属部署の任務全般に関わり、幅広い業務に携わることができましたが、主には二つの事業のモニタリング・評価と報告書作成を担当しました。

一つ目の、世界エイズ・結核・マラリア対策基金事業は、7つのNGOとの連携の下、社会サービスへのアクセスがもっとも限られる地方部の7市町村において、年間約7万名の住民を対象としました。活動内容は、HIV/エイズをはじめとする性感染症、リプロダクティブ・ヘルス（性と生殖に関する健康）、ジェンダーに基づく暴力に関する啓発活動、性感染症の自発的カウンセリング・検査の実施、HIV母子感染予防活動、HIV陽性者とその影響を受ける子どもの支援です。

二つ目は、妊婦のHIV治療アクセス拡大事業（OHTA: Optimizing HIV Treatment Access for Pregnant Women）と言い、スウェーデン国際開発協力機関とノルウェー開発協力局の資金拠出の下、UNICEFがコートジボワール、コンゴ民主共和国、ウガンダ、マラウイの4か国で実施しているプログラムの一環でした。コートジボワールでは、第一都市であるアビジャンを含む4つの市町村で、年間約8万5千名の妊婦を対象に、HIV母子感染予防を目的として、地域保健員の養成、啓発活動、HIV陽性と診断された妊婦のフォローアップと心理社会的ケアを行いました。この事業は、妊婦が服用する抗レトロウイルス薬の最新の処方方法をコートジボワールに導入するためのパイロット事業でした。そのため、保健・エイズ対策省、国連エイズ合同計画（UNAIDS）、世界保健機構（WHO）、国連人口基金（UNFPA）、米国大統領エイズ救済緊急計画など、関係各所と特に緊密な連携・調整を図りながら実施されました。

これら二つは、エイズ対策・青少年支援部署の抱える主要な事業であり、UNICEF コートジボワールの国事務所職員と地方事務所職員、そして事業地に駐在するコンサルタントから成る、総勢9名のチームで運営に当たりました。その中で私が担当した業務の一つが、モニタリング・評価で、ベースライン・データと毎四半期の進捗を測るデータの収集・分析、活動報告書の分析と活動に関する改善点の提案、モニタリング・評価枠組みの管理、事業視察などを行いました。担当業務の二つ目は報告書作成で、毎四半期の進捗を測るデータの分析に基づき、事業地駐在のコンサルタントと協働して業務に当たりました。また、世界エイズ・結核・マラリア対策基金のジュネーブ本部より訪問があった際には、プレゼンテーションを行いました。



【地方の遠隔地を巡回するモバイル・クリニック】



【ヘルス・センターの待合室】

そのほか、エイズ対策・青少年支援プログラムに関するマネジメント補佐として、(1) コートジボワール政府省庁、国連機関、NGO 参加の各種会議における、グループワークセッションの進行や議事録作成 (2) 2013 年プログラム成果測定と、それに基づく UNICEF 年間活動報告書の草稿作成 (3) 2014 及び 2015 年プログラム活動計画、成果分析表の策定 (4) UNICEF 国内委員会を対象とした事業企画書の作成 (5) 事業受益者へのインタビューと受益者紹介記事の執筆 (6) 2010 及び 2011 年、コートジボワール大統領選挙後の混乱下における、エイズ対策・青少年支援プログラムを総括する調査報告書の編集、などを担いました。

4. 海外実務研修での感想は？一番印象に残っていることは？

海外実務研修を振り返ると、1 年間だったとは思えないほど、本当に多くの知識を得て、当初想像していた以上に充実した、貴重な経験を積むことができました。その中でも特に印象に残る学びとなった点を、三点挙げたいと思います。まず、実に多文化的な職場環境において同僚と働いたことで、自身もつスキルの中で比較優位となる点、逆にまだ成長が必要である点が明確になりました。このことは、今後のキャリア構築を考えるうえで、非常に有益であったと思います。次に、海外実務研修を通して、UNICEF という組織の仕組みや、その実用的なツールやガイドラインを知ることができました。これらの理解は、UNICEF で勤務をしていく上で欠かせない、基礎的かつ重要なものであると思います。最後に、国際機関としての UNICEF の役割と特徴についても、理解が深まりました。NGO が草の根で活動するのに対して、国際機関の主な任務とは、被支援国の中央政府や国際社会に対し、政策提言や政策形成の支援を行うことではないかと思います。この点はイメージとしては持っていましたが、実際に国際機関に自分の身を置いてみると、受益者の方と直接交われる機会はとても限られており、前職である NGO 職員としての業務との違いを実感しました。もちろん、両者の協働や、他の国際協力アクターとの連携もありますし、具体的な状況は国によって異なると思います。そのうえで、大枠として、国際機関としての UNICEF の役割や特徴を体験的に理解できたことは、今後のキャリアの方向性を探り、そこで求められる経験やスキルを知るためにも、とても重要な点だったと思います。



【地方の村の助産師、看護師とその家族とともに】



【啓発活動を担う子どもたちと】

5. 今後のキャリア・プランを教えてください。

今回の海外実務研修で得られた経験に加え、大学院で行った子ども兵の研究や、NGO 職員としての緊急人道支援の経験を活かして、今後は「緊急時の子どもの保護」分野において、プログラム／プロジェクト・マネジメントやモニタリング・評価に従事することを希望しています。次のステップとしては、国際機関 JPO (Junior Professional Officer)として UNICEF に派遣される予定となっています。派遣される国は、やはり自身のフィールドであるアフリカの、紛争中、もしくは紛争後の国を希望しています。他方で、ちょうど先日、UNICEF の人事局長が「緊急人道支援と、開発段階にある国の平時の政策支援、そのどちらもできる人材が必要である」ということをおっしゃっていたのを聞きました。そのため、「緊急時」ということには今はこだわらず、幅広く「子どもの保護」という専門性を深めていきたいと思えます。

6. 平和構築人材育成事業への参加を考えている方にメッセージをお願いします。

私は本事業を、平和構築について国連機関などの最前線を知る講師陣から学びたい方、国連ボランティア (UNV) として働きたい方、国際協力キャリアにおいて“同期”が欲しい方に是非お勧めしたいと思います。国内研修では、研修員一人ひとりがそれぞれのバック・グラウンドに基づいてクラスに貢献することが求められますので、そのような姿勢で臨むことが大切ではないかと思えます。また、海外実務研修の派遣先は研修員の専門性、経歴、スキルにマッチしたものとなりますので、この点を念頭においてキャリアを積み重ねていく必要があるかと思えます。がんばってください！